



.....  
 監督＝ピーター・ウェーバー／  
 出演＝スカーレット・ヨハンソン／コリン・ファース／トム・ウィルキンソン／キリアン・マーフィー／エッシィ・デイビス／ジュディ・パーフィット（ギャガ・コミュニケーションズGシネマグループ配給／2002年イギリス映画／100分）  
 .....

17世紀のオランダの天才画家フェルメールが描いた「真珠の耳飾りの少女」の誕生物語をスリリングに描いた芸術モノ。後世に残る名作は、そう簡単に生まれるものではなく、そこにはさまざまな人間模様があり、「男と男」「男と女」そして「女と女」のすさまじい確執が……。芸大生や美大生には、絵の具の工夫や光の工夫なども参考になるはず……？

## ♣ オランダという国

オランダはドイツの西隣りにあり、ドーバー海峡をはさんで西側のイギリスと面している国。そして南には、ベルギーとルクセンブルクをはさんでフランスがある。その国土面積は、日本の九州と同じくらいで、人口は1600万人。オランダの名物は風車とチューリップ、そして運河。司馬遼太郎氏は、その著書、『街道をゆく〈35〉オランダ紀行』の中で、「どうも、この町がすきである」と率直に、オランダの古都ライデンのまちを誉めている。

私事で恐縮だが、私の学問上の尊敬する先輩であり、かつて大阪府知事選挙に立候補したこともある角橋徹也氏は、オランダが大好きで、何と60歳を過ぎてから、オランダの国立社会科学研究所（ISS）に2年間、留学したほどだ。角橋氏のオランダ留学体験記は、『オランダにみるほんとうの豊かさ 熟年オランダ留学日記』（角橋佐智子・角橋徹也著・2003年・せせらぎ出版）として出版されているので、オランダに興味のある方は、是非これを読んでもらいたい。

## 映画の舞台は美しい運河のまち、オランダ

時代は1665年。舞台はフェルメール一家が住むオランダのデルフト。前述のようにオランダは運河のまち。家の前には運河が流れ、その運河を小舟が通っている。飲み水は別だが、洗濯するのはこの運河の水。もっともオランダは日本よりかなり寒い国だから、冬にはこの運河は凍ってしまい、通行の役には立たなくなってしまうが……。

## 1枚の絵に秘められた物語

『真珠の耳飾りの少女』、通称「青いターバンの少女」は、17世紀のオランダの天才画家フェルメールの手によって描かれたもので、現在、オランダのハーグにあるマウリッツハイス美術館に常設展示されている。この映画は、この1枚の絵がフェルメールの手によって描かれるまでの、「男と男」「男と女」、そして「女と女」との間で展開された生々しい人間の葛藤のありさまを描いた興味深い物語。いくら天才とはいえ男性の画家が、他方いくら女中とはいえ1人の魅力的な若い女性モデルと、2人きりでアトリエの中で過ごすことについては、さまざまな人間の心の葛藤が生まれて当然かも……？

## 芸術家の家は大変！

フェルメール家の「家長」はもちろん画家のフェルメール（コリン・ファース）。彼はすごくハンサムないい男だが、芸術家らしく、気難しそうで無口な男。そして自分の芸術にすごく忠実なため、1枚の絵を描くのに相当の時間がかかる。そのため、多くの注文を受けることができず、唯一のパトロンはファン・ライフェン（トム・ウィルキンソン）のみ。だから、妻のカタリーナ（エッシィ・デイビス）は、いつもお金の苦労をし、宝石を切り売りして生活しているからイライラの毎日。その上夫婦ゲンカが絶えないのに、なぜか6人という子たくさんのため、家の中はいつもてんやわんや。

こんなフェルメール家の中で、パトロンとの仕事をうまくつないで家計をやりくりし、家庭内を何とか円満にまとめているのは妻カタリーナの母のマーリア

(ジュディ・パーフィット) だった。

### 主人公は17歳の女性、グリート

こんなフェルメール家に、住み込みの女中として奉公に来たのが、17歳の女性グリート（スカーレット・ヨハンソン）。これは、父親が事故で失明したため、父に代わって家計を支えるためだ。

グリエートの仕事は掃除、洗濯、食料品の買い出し等だが、掃除機も洗濯機もない時代だからそれは結構大変で、朝から晩まで大忙し。もっとも、買い出しに行ったことによって、ちょっとハンサムで結構真面目な肉屋のピーター（キリアン・マーフィー）と知り合い、「結婚しよう」と申し込まれるほどになったのだから、女中の仕事もそんなに悪いものではないかも……？

グリートにとって災難だったのは、主人のフェルメールからモデルになれと命じられたため、妻カタリーナの嫉妬の対象となったこと。奉公先の主人の命令に従っただけなのに、ついには「この家から出て行け！」とカタリーナからわめかれてしまうことに……。

### 名画誕生のきっかけは「窓拭き」から

気難しい芸術家タイプのフェルメールにとって、家全体は喧騒の世界でも、アトリエだけは別。ここだけは勝手に入り込んだり、勝手にモノを動かすことは厳禁だった。掃除をするためにアトリエに入るグリートも当然この指示を忠実に守っていた。そんなある日、グリートは「アトリエの窓ガラスを拭いてもいいか？」と尋ね、妻のカタリーナからその許可を得て窓ガラスを拭いていた。するとそれを見たフェルメールは、窓ガラスから入ってくる光の色が変わることによって、そこに生まれる微妙な「光の芸術」を発見した。その「光の芸術」のイメージによってインスピレーションを得たフェルメール。そしてグリートもその美しさに息をのんだ。こんなグリートは、今やフェルメールにとって、自分の芸術の最も良き理解者になっていった。

そこから、『真珠の耳飾りの少女』が生まれることになったのだ。しかし同時にそこからは、女同士の確執が生まれることにも……。

## 男と男

まず男と男の関係は、フェルメールと絵の注文者＝パトロンファン・ライフェンとの関係。ファン・ライフェンはフェルメールの絵画の良き理解者。当時の音楽家、彫刻家、画家などの芸術家は、いかに良きパトロンを獲得するかによって、成功できるかどうかが決まっていたといっても過言ではないほど。したがってファン・ライフェンは大切なパトロンだが、フェルメールは仕事が遅い(?)ので、たくさんの注文をもらうことができない。そのため営業活動(?)は、妻の母のマーリア任せとなっていたが、このマーリアは結構パトロンのご機嫌取りがうまく、今日もファン・ライフェンをホームパーティに招いてのご接待。しかしフェルメールはこういうことはあまり好きではないため、仕方なく付き合っているだけ。そのため、「次に何を描くのか?」と聞かれても、「今は何も考えていない」というつれない返事……。

このようにこの映画からは、この時代の芸術家とパトロンとの関係がよくわかって、興味深い。なお、このファン・ライフェンはスケベだから、過去にもフェルメールの描く絵のモデルに手を出したり……。これも役得の1つと思っているのかも……?

## 男と女

グリートは17歳の清純な娘。知り合った肉屋のピーターと時々デートをして実際の度合いを深め、結婚に至れば理想的だが、それでは物語にはならない。物語の上でウエイトが大きいことは、グリートがフェルメールの「光の芸術」の良き理解者だったということ。そのため、グリートはフェルメールの「助手」として絵の具の調合をするのみならず、パトロンから注文を取った「集合肖像画のモデル」とは別に、ついにグリート1人をモデルとして絵を描くことに……。もっともこれは、フェルメールにとっては男女関係を意識したものではなく、純粹に芸術的インスピレーションと芸術的欲求にもとづくものだったようだが、本当にそれだけかどうかは微妙なところ。特に、真珠の耳飾りを耳につけるため、フェルメールがグリートの耳に針で穴を通すシーンでは、2人の心がどこまで接近して

いるのか、と思わず詮索したくなかったが……？

スケベ心を露骨に出したのは、パトロンのファン・ライフェン。彼は真っ昼間から、洗濯物を干しているグリートをモノにしようと迫るが、タイミング悪く、妻のカタリーナから声をかけられて挫折(?)。しかし、そこで言う、「このことを主人にバラしたら、即クビにしてしまうぞ!」というセリフはあまりにも身勝手では……？

### そして女と女

最近、グリートがよくフェルメールのアトリエに入っている。それは、注文を受けた集団肖像画を描くためだけなのか……？ 2人はアトリエで何をしているのか……？ そのうえ、夫は真珠の耳飾りをグリートにつけようとしていたが、あれは一体、何なのか……？ いろいろ気にし始めると気になることばかり。しかし妻たるもの、そんな「不安」を見せることは沽券にかかわる。そんなイライラを抱えたカタリーナは大変だ。それをうまく調整していたのは、カタリーナの母のマーリア。カタリーナが外出した時を見計らって、カタリーナの真珠の耳飾りをフェルメールに渡し、肖像画の完成を応援したのはマーリアだった。

しかし、今日はついにそれが爆発! アトリエに入り、絵を見せると迫るカタリーナ。フェルメールは、注文者にまだ見せていないからとこれを拒否したが、あまりの剣幕にやむなく……。グリートの肖像画を見たカタリーナは怒り狂い、そのキャンバスを切り裂こうとまで……。何とも女の嫉妬はすごいもの……。そしてついにグリートは、「この家を出ていけ!」と叫ばれてしまったが……。

### この映画の原作は？

この映画を観ていると、まるでフェルメールの自叙伝の中に、この『真珠の耳飾りの少女』という絵の誕生の秘話を書き残していたのかと思えるほど、実によくできたストーリーとなっている。これは、2人の主人公であるフェルメールとグリートはもちろん、妻のカタリーナや母のマーリアそしてパトロンのファン・ライフェンら登場人物の心の動きが手に取るようにうまく描写されており、そのすべてに全く無理がなく、説得力があるためだ。ところが実は、この映画の原作

は、トレイシー・シュヴァリエによって書かれたもので、1999年に出版され、200万部を超えるベストセラーとなった小説とのこと。トレイシー・シュヴァリエは、19歳の頃からこの絵をベッドルームに飾っていたが、ある朝、ベッドに横になって絵の少女の顔をじっと見つめていたら、「フェルメールは、いったいどうやって、彼女からあの幸せそうな、でも悲しそうに見える表情を引き出したんだろう？」と考えて、小説の着想が浮かんできたとのこと。そしてその後、わずか3日間で小説の構想が練られたとのことだ。

トレイシー・シュヴァリエも、自分の原作がこんな立派な映画として製作・公開されて、さぞうれしいことだろう……。

### 絵の美しさラブストーリーとの絶妙のバランス

この映画は、芸術映画であると同時に、抑制されたフェルメールとグリートの間のラブストーリー。フェルメールには妻子があり、グリートには肉屋の彼氏がいる。また家長のフェルメールが住み込み女中のグリートに「手を出す」わけにはいかないことは当然。だから、尊敬の気持とともに、秘かに恋心を抱くグリートも、逆にグリートに対して自分の芸術の良き理解者やモデルとしての価値を超えた気持を持つフェルメールも、それを行動に移すことはできない。17世紀という時代的制約の中での、このような2人の抑制された微妙な男女の気持をうまく表現したこの映画はお見事という他ない。

他方、この映画は微妙な光が織りなすコントラストの妙を実に美しく観客に教えてくれる。そしてまた、絵の具の調合という作業があの時代、いかに大切な仕事であったかということもよく教えてくれる。そんな大切な仕事を、自分の良き理解者であるグリートにやらせることにフェルメールは大いなる満足感を覚えたはずだし、他方グリートもそういう形で自分がフェルメールの役に立っていると自覚できることにすばらしい充足感を覚えたことだろう……？

私のような素人でも感心するのだから、芸大生や美大生にはこの映画は必見だ。多くの観客が、じっと息をのんで観ていたことが十分うなずける秀作といえるだろう。

2004(平成16)年5月6日記